

2021年5月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

5月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、20日（木）、NHK福岡拠点放送局（ウェブ開催）において、10人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「2020年度九州沖縄地方放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、事前に視聴したザ・ライフ「大切畑 故郷“再生”の時間」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に6月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	富田 めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
副委員長	田川 大介	（株式会社 西日本新聞社 編集局総務）
委員	秋本 順子	（金属造形作家）
	乾 眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	大鋸 あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン株式会社 取締役放送部長）
	楠田 喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗 常務取締役）
	籠田 淳子	（有限会社 ゼムケンサービス 代表取締役）
	関西 剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	西野 友季子	（株式会社ニュー西野ビル 代表取締役）
	古荘 貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）

（主な発言）

<ザ・ライフ「大切畑 故郷“再生”の時間」

（総合 4月16日（金）放送）について>

- 熊本地震から5年間たった西原村大切畑地区に住む村民のインタビューや映像で、強いつながりを伝えた非常に丁寧なヒューマンドキュメンタリーだったと思う。大谷幸一さんにとって復旧工事の完了は復興の終わりを意味していないことや、若者が外から移住して来ないと村が大きくなっていかないという現実を知った。人と人とのつながりは非常に丁寧に描かれていたが、再生の記録という視点で見ると、国や県など行政との交渉の様子は省いたのかなと思った。現実にはそのような過程もあったのではないかと少し気になった。

- 一つの地区を長年取材することで、地震から5年、何がどれだけ行われたのかという経過が非常によく分かった。端から見ると、道の復旧や住宅の建て替えなどを復興と捉えがちだと思うが、番組では離れ離れになった村民の心の問題とふるさとへの思いをテーマとしてこだわって描いていたと思う。大谷さんが預かり育てていた樹木を、新しく建て替えた住宅に植え替えるシーンに、思いを引き継いで再生することを伝えるという番組の意図を感じた。互いに酒を酌み交わしながら涙を浮かべ、仲間を大切に作る人間の素顔がよく描かれていたと思う。
- 随所に復旧イコール復興ではない、というメッセージが散りばめられていたと思う。5年がたち、元の生活に近づきつつあると思ったところで、小屋のラストシーンはよかった。大谷さんが小屋に一人で住み続けている映像は、復興はまだ先だと思わせ、BGMや編集も効果的だった。冒頭、無人になった集落をパトロールするために造られた小屋と紹介があったが、小屋は誰のものか気になった。また、大谷さんのバックグラウンドが分からなかったため、発言が抽象的に聞こえてしまった。山口誠一さんの新築祝いのシーンで、会話にテロップが出ていたが、言っていることとテロップの内容が違ったのではないかと感じた。消防団や飲み会、会合など登場人物が男性ばかりで、女性の意見も聞いてみたいと思った。制作スタッフも男性ばかりに見える、女性がいたらどのような番組になったのか気になった。飲み会のシーンがいくつかあり、お酒の力で話せる本音もあると思うが、小さい頃から家族のように暮らしてきた人たちのお酒抜きでのやり取りをさらに聞いてみたかった。
- 熊本地震から5年がたち、被害の大きかった大切畑地区に住む人の今の生活を知ることができた。被災地の状況にふれることができる情報は貴重だ。大切畑に住んでいる人の思い、幼なじみが被災し、引っ越し際のやり取りなどいたたまれない気持ちになった。全体を通して、大谷さんの大切畑に対する思いを強く感じた。また会合で、最初は大切畑地区からの移転を支持する意見が多かったが、話し合いの結果、多数決で復興すると決まった際の大谷さんの顔がとても印象的だった。再建に向け、復興工事、人口減少、高齢化などさまざまな課題があるが、引っ越した幼なじみも消防団の活動や焼き畑に参加してくれ、地域のつながりが保たれていたのはよかったと思う。最後の小屋のシーンは印象的だった。
- 番組を見て、九州で一生懸命に生きている大切畑の人たちとつながっている充実感があった。反対意見の人たちと議論する会合のシーンが特に印象に残った。心が折れそうになりながらも、一人一人の思いを受け止める大谷さんの姿に引き込まれた。大谷さんには、諦めず人に会い、感性に訴える人間力と、アンケートを活用して語る理性があり、すばらしいリーダーシップを感じた。大切畑地区を守り残してい

くことは、実際は未来を担う若者に託していくことだという点も共感した。大谷さんの志を引き継ぐ人を育てていくことが必要だと思った。災害復興には女性の力も必要だと思うが、女性の視点がほとんど出てこないのが少し違和感があった。また、大谷さんがなぜここまでの志を持つようになったのか、背景についてももう少し知りたかった。命を助けてくれた大谷さんのため、大切畑に残る決断をし、家族にも納得してもらった西本豊さんもすばらしいと思った。

- 大変心に染みわたる番組だった。大谷さんが奮闘し、5年かけて、完全ではなくても、集落がなくなる危機を回避していく話だった。地域を守る必要を感じながらも、家族のために集落を離れた人のエピソードもあり、つらい現実を直視させられた。人のつながりを大切にしなければ、地域は継続できないというメッセージが強く心に残った。取材相手とカメラマンの距離が近く、溶け込んでいることが伝わり、印象がとてもよかった。5年の歳月をかけて一人のキーマンを中心に丁寧に取材し、25分という短い時間の中で、背景にある高齢化、経済、家族の問題などもうまく構成できていたと思う。
- 地域密着の報道番組の第1弾として、時宜を得た内容だった。熊本地震で家屋の9割が全壊した集落の復興を描き、被災地の苦闘を追い続けた貴重な記録だった。地震から5年を経てもなお途上であり、再生をめぐるさまざまな課題や葛藤があることを、多くの視聴者に印象づけることができたと思う。被災地の復興をめぐる取材としては、分かりやすい反面、驚くような意外性はなく、特に集落から離れて、新居を構えた山口さんが、野焼きの日に消防団員として、大谷さんとの約束を果たした場面などは、若干きれい過ぎると感じた。また、好き嫌いの問題だが、ラストシーンについても少しできすぎていると感じた。いずれにせよ5年間の継続取材は、取材相手との信頼関係がなければ成り立たず、丁寧な取材により地域との信頼関係を得られたことで印象深い番組に仕上がったと感じた。正攻法のドキュメンタリー、新番組のスタートとして、非常によかったのではないかと思う。
- 9割の住宅が全壊しても犠牲者を出すことなく、ライフラインまで自分たちで復旧していく様子から、地区の一体感を強く感じた。移転するか残るかの議論で、大谷さんが一人一人と向き合う姿に心を動かされ、さらにそれぞれ違う道を選びながらも、行事に集う信頼関係も心に響いた。再建が進みながらも人が減り、地区が様変わりしている映像には寂しさも感じた。大谷さんの思い、地区の人のことばなど丁寧にまとめられており、5年間取材し、住んでいる人と向き合った姿勢が表れていたと思う。また被災した植木を持ち主に返す場面で、木に対する思いも受け止めながら大事に育てる姿から、大谷さんの優しさを感じた。小屋に住み続ける最後のシー

ンも静かで心にしみ、これからの大谷さんと地域の復興がとても気になった。また、いつ、どこで起こってもおかしくない災害について考えさせられた。

- 人生について深く考えさせられたよい番組だった。しかし、NHKでライフと聞くとコント番組を思い浮かべてしまうので、番組名を決める際、そのような議論がなかったのかと思った。震災から1か月後の話し合いでは、大切畑に住み続けたい人がほとんどいなかったが、60回を超える寄り合いを重ね最終的に復興が決まった様子から、再生には時間が必要であると感じ、完全に元どおりになることは難しいのではないかと痛感させられた。それと同時に、現在の日本から失われつつあるコミュニティーの大切さも感じた。ほとんどの家屋が全壊する中、死者がいなかった要因は、行政の助けを待たず、住む人どうしが力を合わせた結果だと思う。そのすばらしいコミュニティーが地震で一旦壊れかけたが、大谷さんの献身的な取り組みと、そのコミュニティーに愛情を感じる人がいたからこそ再生ができたのだと感じた。最後のシーンは、再生が完了するまでは小屋に住み続けることを決めた大谷さんの決意を表しているのではないかと感じた。

- メディアの役割の多様性を考えさせられた。今回のように記録する役割、世の中の出来事を伝える役割、時には、指針となるものを示したり、楽しい時間を提供したりなどさまざまあると思うが、番組を見て、その場に立ち会い寄り添うといった役割もあると感じた。ストックに前に進む大谷さんにとって、カメラの存在は張り合い、もしくは支えにもなっていたのではないかと感じ、集落全体にも同じことが言えると思った。家屋の9割が全壊し、近くに活断層もあると、集落の再建を諦めてもおかしくなかったと思うが、何とか踏みとどまり、5年かかって復興工事をやり続け、別の地区に家を建てた人も大事な場面では帰ってきてくれる。5年という時間で、大事な局面ごとにそれぞれが大きな判断を迫られたと思うが、そこに自分たち以外のカメラという目線があることは、冷静に俯瞰するという意識も生み、それぞれの思考に少なからず影響もあったのではないかと感じる。5年間をまとめた放送で、住民も、それぞれ感じるものがあつたと思うし、やはり女性の視点からも見たいと思ったので、ぜひ取材を続けてほしい。

(NHK側)

ライフという単語には自然、人生、営みなどさまざま意味がある。それらを踏まえて番組名を「ザ・ライフ」にした。国や県との交渉のシーンはなかったことや、酒の席の本音などについては、さまざまな映像の中から選択した結果だ。女性の視点があつた方がよいという意見は受け止めたい。ラストシーンは、ディレクタ

一が一番こだわったところだ。

(NHK側)

正統派のドキュメンタリーはさまざま取り上げすぎると、焦点がはっきりしない番組になりかねないので、落とさざるを得ない要素が出る。一方で落とし過ぎると疑問が大きくなり、メッセージが伝わらないというリスクも抱えていると思う。ドキュメンタリー番組が以前より少なくなっているが、今後も大事にしていきたい。

<放送番組一般について>

- 4月23日(金)のザ・ライフ「もう一つの“医療崩壊”～コロナ禍の病院で何が～」を見た。病院の経営が赤字というだけでなく、新型コロナウイルス感染拡大による受診控えで、病気が悪化する場合もあるため、受診してほしいというメッセージも感じた。しかし受診を控えるすべての人が、医療をそもそも必要としているのかという疑問もあり、興味深く見た。戦後の医療を取り巻く流れ、現在の過剰な病床、医療崩壊の原因となる構造などがよく分かった。1人当たりの入院医療費と10万人あたりの病床数のグラフは、わかりやすく効果的だった。医師の森田洋之さんの解説もとても分かりやすかったが、医療体制の縮小についてはもっと詳しく聞いてほしかった。都道府県ごとに病床の機能や削減について話し合われ、一部病院の統廃合も行われているものの、地域医療連携推進法人がまだ21法人なのはなぜかという答えがあれば、なおよかった。訪問医療、在宅医療も地域医療構想に含まれると思うが、メリットがある中で進んでいない理由も知りたかった。新型コロナウイルスに関する報道は長引き、視聴者からも敬遠されがちだが、決して目を背けず、真正面から課題を取材し伝えることがとても重要だと思う。
- 4月23日(金)のザ・ライフ「もう一つの“医療崩壊”～コロナ禍の病院で何が～」を見た。冒頭の「正直これでは病院は潰れます」という院長のことばがとても衝撃的で、興味を引かれる始まり方だった。病床使用率が95%以上でないとは赤字にならない中で、クラスター発生により現在の使用率は50%であるという話を聞き、もともと経営として成り立たせることはかなり難しいのだと感じた。日本の民間病院が戦後急速に増えた経緯や、国が財政難で診療報酬を抑制していること、さらに民間病院が全体の8割を占め、病院経営は、協力関係ではなく競争関係になって

いることなど、さまざまなことを知ることができた。経営方針を話し合う会議で医師たちの生々しい発言を撮影できていたのが衝撃的だった。夕張市の医療崩壊に関して、病床が10分の1になったが、死亡者総数は変わらないというグラフは、人口減の影響など、データとして少し不足していたと思う。社会構造が急速に変わることで医療の問題点があらわになり、崩壊していく背景を理解できた。

- 4月23日(金)に再放送された逆転人生「電光石火！コロナ禍で売上ゼロからの逆転」を見た。夕方から夜にかけて、新型コロナウイルスに関するニュースが続き重たい気持ちになるが、この番組は希望に満ちたヒントが得られるため、とても楽しみにしている。今回は新型コロナウイルス感染拡大の状況で、売上げゼロから過去最高益を出した企業の回でとても興味があった。社長の山野智久さんが、雇用を守りながら事業を継続するという大きな目的のもと、発想の転換でいかに苦難を乗り越えるかがとても興味深かった。この番組は、回想シーンは別人が演じることが多いが、今回は業績がゼロになり、その4倍の業績を上げるところまで本人に取材していたので、とても迫力があつた。“ビフォーコロナ”、“アフターコロナ”のようなことばの使い分けも明解で、「社会情勢が動くときには社会のルールが変わる。このルールが変わるところにビジネスチャンスがある」ということばはさまざまな業界でもヒントになると感じた。
- 4月24日(土)のNHK映像ファイル あの人に会いたい「半藤一利(作家)」を見た。半藤さんの本を読んだことがあるので気になって見た。半藤さんの話し方が特徴的で、昭和前後の歴史認識について「このままで本当に大丈夫だと思っているのか」「私たちのリアリズムではこの国は守れないんだ。外交の力が一番大事なんだ」といった、知識に裏付けされた力強いことばを感じることができた。またインターネットで検索したところ「あの人に会いたい」という番組サイトのほかに、過去の出演者のショートムービーを見つけた。ネット上で見られるアーカイブスを初めて見たが、偉人、著名人の膨大な映像データが蓄積され、見たいときに見られる環境はすごいと思った。しかしアーカイブスで見られるのはいいことだが、無断転用に対するリスク管理をどうしているのか気になった。
- 5月1日(土)の【ストーリーズ】事件の涙「たどりついたバス停で～ある女性ホームレスの死～」を見た。60代のホームレスの女性が殴り殺された事件の背景を深く取材した、優れた番組だった。スーパーマーケットの試食販売員として真面目に働いていた女性が、新型コロナウイルスの影響もあり、失業し、住むところもなくしてもなお、兄弟含め助けることができず、追い詰められた現実があつた。バス停で寝

泊まりする女性に気づいていたにも関わらず、彼女が誰なのか知る人はおらず、存在を邪魔だと感じた男により殴り殺された事件だったが、新型コロナウイルスは感染せずとも弱い立場の人を追い込んでいくことを、事件を通し具体的に明らかにしたと思う。現代社会のひずみにも目を向ける番組で、事件の一報だけでは分からない背景を深く探った力作だと思う。60代のホームレス女性という観念は、女性が劇団員だった1枚の写真により一気にリアルな存在になり、「殺されたのは私だったかもしれない」というホームレス経験のある若い女性の話も説得力を持って伝わった。特筆すべきは、「事件記者取材ノート」というウェブサイトに、紹介しきれなかった取材過程をつまびらかに記していたことである。記者とともに取材対象に迫っていく緊張をリアルに感じることができた。テレビとウェブサイトというハイブリッドの報道の試みとしても成功していたと思う。

- 5月3日(月)に再放送されたBS1スペシャル「父と子のアラスカ～星野道夫 生命(いのち)の旅～」(総合 前1:50～2:39)を見た。アラスカを愛した写真家・星野道夫さんの息子である翔馬さんが22歳になり、「アラスカを見て父を知りたい」と静かに語る冒頭シーンに興味を引かれた。翔馬さんがアラスカの人に温かく迎えられる姿から、道夫さんが愛されていたことを強く感じた。翔馬さんが語る思いやことばと20年前と今のアラスカが交差していく様子は、父と子が共にアラスカを歩んでいるようにも感じられ、心が温かくなった。父の親友だったボブさんの「今も自然の中に道夫は生きていて、翔馬の中にも道夫を感じる」ということばも印象的で、素朴で自然体な姿が道夫さんに重なって見えた。人の温かさや、自然との関わり、命についても伝えるすばらしい番組だったと思う。「短い一生で心引かれることに多くは出会わない。もし見つけたら大切に、大切に」という道夫さんが残したことばもとても心に響いた。番組が翔馬さんに焦点を当てることになったいきさつが気になった。
- 5月14日(金)のフカイロ!「大分で最期を迎えたいのに・・・～外国人の墓問題を追う～」を見た。イスラム教徒の土葬の問題を広範囲に取材した番組だった。外国人の父がいるホルコム・ジャック和馬アナウンサーが司会を務め、ゲストはイラン出身のサヘル・ローズさん、また大学でアラビア語を勉強し、留学経験もあるという女性記者が進行していた。難しい問題を伝えるうえで、3人のキャスティングはとてもよかった。まずモスクでのインタビューでは、外国人が死ぬまで日本に住みたいという考えに変わってきていることが分かった。大学教授のカーン・ムハンマド・タヒル・アッバースさんが、土葬を反対する地元の人にイスラム教の風習や食事を紹介し、文化への理解を深めようとする映像や、日本人の反対理由を伝える映像を見たサヘルさんの「心が苦しい」ということばには胸をうたれた。着地点を見つけ

るのは難しいが、住民の意見が分かれる問題に向き合う提案型の番組は大切だと思った。日本全国で9か所ある土葬ができるイスラム教徒の墓が西日本にはないという現実については、もう少し丁寧に伝えてもよかった。

- 5月14日(金)のくまもとの風「終わらない“MINAMATA”」を見た。水俣病の公式確認から65年たち、ジョニー・デップさんの企画・主演で映画化され、再び水俣に注目が集まったが、一部の市民の望みとは相反しているかもしれないと感じた。水俣は自然豊かな場所だが、映画化により水俣病のイメージが強まることを懸念している。イメージ払拭のため、病名変更を求める活動が起こったことなどは、長年にわたり悩み、苦しんできた歴史を思うと非常に複雑な気持ちになった。申請があった2万8,000件中、認定されたのは1割にも満たず、自身で水俣病を証明するハードルが高いことも初めて知った。何度も申請し、いまだに認定されない佐藤英樹さんと、早々に認定され、水俣病の象徴として活動してきた坂本しのぶさんの二人が番組の中心人物だったが、それぞれが深い悲しみを背負ってきたいきさつを知り、決して公害は起こしてはいけないものだと改めて痛感した。水俣病の難しさは、当時の市の経済を担うチッソが原因企業だったため、擁護する市民も大勢いたことだと思うが、番組で一切そこに触れていなかったのが少し残念に感じた。
- 4月2日(金)から6回シリーズで放送されたアーキテクツ プレイス 北欧発建築家の幸せな住まい (Eテレ 後10:30~10:59)を見た。北欧を中心に活動する6人の建築家の自宅を取材するという視点が大変興味深かった。暮らしの哲学が、空間や形にそのまま表れるという各回の構成には納得感があった。新型コロナウイルス感染拡大の状況などによるストレスを癒やすのは自分の家と環境だと思う。地域の風、光、気候、そして文化などを生かした暮らしで、家にいる時間がさらに充実できると感じた。出演した建築家は、設計、デザインだけでなく、自身で建築作業も手がけているのもとてもよいと思った。高層マンションに住むことだけが憧れの暮らしではなく、風を感じる感覚や、音・匂い・景色が四季とともに変わっていく中に家がある面白さを感じた。日本の四季がある暮らしも価値があるものだとあらためて世界に発信してほしいと感じた。
- 5月15日(土)のFMシアター「ふしぎの国のハイサイ食堂」を聴いた。食堂を舞台に、店主のおばあど、都会から戻り働く青年、そして食堂がよりどころの人たちをめぐる物語で、じんわりと余韻が残るよいドラマだった。現代社会に生きづらさを感じた人を、おばあがおおらかに包み込み、食堂がシェルターのように描かれていた。安心できる居場所、お腹を満たせる食堂によって持ちこたえられ、依存できるか

ら自立できるという強いメッセージは、つくり方によっては少し説教めいてしまうと思うが、無理のないキャラクター設定、自然なせりふでドラマに浸ることができた。一方で「ふしぎの国のハイサイ食堂」というタイトルは軽く、番組のよさを十分に伝え切れていないと感じた。味や温かさ、お腹が満たされる安心感という食の表現を丁寧にするすることで、共感性が高まり、ドラマがより伝わったと思った。おばあ役の俳優である吉田妙子さんが、沖縄のイントネーションながら、県外の人にも通じる絶妙なあんばいだったのが特によかった。また、脚本に兼島拓也さんを起用したこともすばらしかった。自然なせりふ回しなどよい面が随所にあった。

(NHK側)

水俣に関しては、ずっと取材を重ねてきている。時代時代でさまざまなテーマがあり、若い職員も取材している。これからも多様な意見を聞きながら、後世に伝えていきたい。

(NHK側)

新型コロナウイルス関連の報道が長引き、敬遠されがちだという指摘には同じような問題意識を持っている。伝え方をさらに工夫し、希望を持ってもらえるようなアプローチ、サイトとの連携なども一つの方法かもしれない。きちんと役割を果たし、少しでも世の中の役に立つ放送を増やしたい。

- 「緑なき島」に対する検証をぜひお願いしたい。前田会長が、令和3年度の参議院総務委員会の予算審議で、別の炭鉱で撮影された映像を使用した事実は確認されなかったと回答していた。今年17日の国会答弁では、番組制作の検証について、外部の有識者から意見を聞くという趣旨の、前向きな発言をしており、引き続き検証と説明が行われることを期待している。

以前「実感ドドド！」で放送した「追憶の島～ゆるる“歴史継承”～」での、産業遺産情報センター長の証言部分の編集についても、NHKに対する信頼を損なうことにもなりかねないので説明してほしい。ネットに公開された映像を見て驚き、疑問も感じた。朝鮮人労働者への圧力があったという「負」の部分も認めながら歴史を残すべきだという番組の企画は秀逸だ。しかし、番組オープニングの引用だけは、産業遺産情報センター長の発言趣旨と異なると言わざるを得ない。そもそも、番組という「負」とセンター長のいう「負」の意味合いが異なっているため、かみ合っていないと感じる。企画にはまったことばを引き出したい気持ちはわかるが、インタビューの手法や編集によっては誤報につながる恐れがあるので気をつけられたい。

(NHK側)

昨年10月16日に放送した「実感ドドド!」について、産業遺産情報センター長が雑誌等のメディアで発言していることは把握している。番組のインタビューが恣意的（しいてき）に切り取られたのではないかという主張については、国会でも指摘されており、NHKとして「番組では、産業遺産情報センター長が、センターの役割や展示内容を説明する場面のほか、日本の近代化に貢献した遺産の詳細が紹介されていること、朝鮮出身者について記載した、当時の新聞記事や法令などが端末で検索できることなどを、約3分間にわたって紹介し、その取り組みや考えをお伝えした。インタビューは、限られた番組の放送時間の中ですべてを放送することができないため、全体の文脈を踏まえ編集しています」としている。

NHK福岡拠点放送局
番組審議会事務局

2021年4月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

4月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、15日（木）、NHK福岡拠点放送局（ウェブ開催）において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した実感ドドド！「絵が自由をくれた～自閉症の画家と家族～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に5月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	富田 めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
副委員長	田川 大介	（株式会社 西日本新聞社 編集局総務）
委員	秋本 順子	（金属造形作家）
	乾 眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	大鋸 あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン株式会社 取締役放送部長）
	楠田 喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗 常務取締役）
	籠田 淳子	（有限会社 ゼムケンサービス 代表取締役）
	関西 剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	西野 友季子	（株式会社ニュー西野ビル 代表取締役）
	古荘 貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）

（主な発言）

<実感ドドド！「絵が自由をくれた～自閉症の画家と家族～」

（総合 3月5日（金）放送）について>

- 心温まるすてきな番組だった。画家の太田宏介さんが生き生きと絵を描く姿を見て、障害の有無に関わらず、夢中になれるものの大切さ、すばらしさを改めて感じた。大声で叫びながら暴れる子どもだった宏介さんに、絵を習わせてみようかと決断した母親の勇気と、宏介さんを受け入れ熱心に指導した絵画教室の松澤佐和子先生の愛情のおかげで、宏介さんは人生をかけるものに出会えたと思う。障害のある家族をもつ人々が、この番組を見て希望を感じてくれたらと期待している。また宏介さんの絵は色使いがとても特徴的で、見る人を元気にするパワーを感じた。障害があっても自立して、お金を稼ぐことができる人が増えていくためにも、存在を当たり前前に受け入れる社会になっていく必要があると感じた。

- 宏介さんの才能を生かした活躍ぶりが描かれており、作品のすばらしさを感じた人も多かったと思う。自閉症の画家として知られ、作品によって、障害やその特性への理解が広がっており、番組の構成もねらいが分かりやすく、訴えかけるものがあった。一方で自閉症の画家という紹介や肩書が、常について回るのがもどかしく感じた。宏介さんの作品は、障害のある人が描いたからではなく、作品自体が高く評価をされるものだと感じる。もちろん作者の特性や背景を知ること、より深く作品を鑑賞できるため、番組は宏介さんや作品を知らない人にとって胸を打つものだったと思う。歴史的にも芸術、文学、スポーツ界で、極めて優秀な成績を残した人の中には、障害がある人もいたのではないかと思う。障害を克服することで感動を与えるのではなく、そのような特性を生かすことで、多くの実を結んでいるのではと感じた。このような本質まで視聴者の視点を広げることができれば、なおよかった。
- 心温まる家族愛の番組だった。家族の苦悩や心情の変化が丁寧に伝わってきて、とても好感を持てた。宏介さんや母親が、講演会など悩みを相談できる場をさまざま提供していることは、同じ境遇の人に寄り添い、救いになると感じた。「立派な絵を描く障害のある画家はいると思うが、彼の絵には感情や優しさなどが表現されていて、それが人に感動や癒やしを与える」という信介さんのことばは大変納得できた。心温まる、寄り添うようなBGMもとてもよかった。番組最後で信介さんのことばのあとに、宏介さんが食事のため家に帰っていくシーンがあったが、あのシーンをあえて入れたのはどのような意図があったのか気になった。
- とてもシンプルで分かりやすく、優しい気持ちになった。障害のある人の絵が一堂に並ぶ中、真ん中にある宏介さんの絵が特に目に留まるのはなぜだろうと気になって見た。宏介さんが絵としっかり向き合い、本当に自由に絵の中で存在を表現できていると感じ、この絵のすばらしさ、絵の中の動物の瞳が私たちに訴えているものを感じた。宏介さんの家族が障害のことを隠したいと思っていたという情報も、改めてすごく大切だと感じたし、信介さんが発足している、自閉症の兄弟を持つ人々の集まりである“きょうだい会”の存在もすばらしいと思った。宏介さんの存在を通じて、愛のあるつながりができていることがとてもすばらしいと感じた。芸術、美術のすばらしさとともに、その周りにはいる家族、地域のつながりを感じた、とてもよい番組だった。
- 家族の愛情と、家族の在り方を目の当たりにした。信介さんと母親は宏介さんの存在を隠したかったという過去に苦しい思いがあったが、現在は感謝するようになったといった心境の変化を見ることができてよかった。宏介さんの描く優しい絵を、

介護施設や病院など、病気や精神的に弱っている人にも見てもらいたいと絵画レンタルを始め、“きょうだい会”を立ち上げた信介さんの社会貢献活動はすごいと思った。宏介さんが若いときに、どのように絵を上達させてきたのか、松澤先生の話も深く聞いてみたいと思った。

- しばらくはきれいにまとめられた番組だという印象を受けていた。自閉症の弟が原因でバラバラになった家族が、宏介さんの絵が評価され一つになり、その絵を見た人が元気になる。視聴者もその存在を知り、障害者への理解を深めるという幸福な展開だったが、もし宏介さんに絵がなかったらどうなるのかと思った。その見方が変わったのが「絵以外でも弟の明るさだったり、素直さは、一人間として見習うべきこともある」という信介さんのことばだった。タイトルに「絵が自由をくれた」とあるが、自由は宏介さん本人だけでなく、家族にももたらされたものだと感じた。また自由は気持ちの持ち方、行動次第で得られるものとも思った。日本における障害者の数は総人口の約7.4%という統計があり、13人に1人が障害者ということになる。それにも関わらず、優生思想は悪とされながらも、出生前診断で異常が見つかった場合に中絶が選択される場合もある。まずは障害について正しく理解することが必要で、このような番組の意義は大きいと感じた。
- 障害を持つ人が特別な才能を発揮する話は見聞きすることがあるが、宏介さんの絵はとても力強く、独特な色使いや感覚がすばらしいと感じた。障害者を家族に持つ恥ずかしさから存在を隠していたが、絵をきっかけに家族が一つにまとまり、お互い支え合う存在になっていく様子が丁寧に、かつ簡潔にまとめられていた。母親と信介さんそれぞれの思いと変化、そして宏介さんの絵と接した人の反応など、それぞれの立場で構成されていたのもよかった。ナレーションや音楽も心地よかった。「絵が自由をくれた」というタイトルは宏介さんだけでなく、家族にも生き方の自由をくれたという意味があったと考え、とてもよいタイトルだと感じた。障害のある家族を持つというストレスを抱える人に、癒やしと元気を与えたと思う。一方で、もし絵の才能が出ていなかったらと考えるとともに、宏介さんは絵で自身を表現できているが、このように才能を見いだしているケースは一部なのだと考えさせられた。また、もし自分の家族に障害があったらどうしていたかなど、さまざま考えさせられた。障害者を家族に持つことを理解し伝える意味でも、このような番組をもっと放送してほしい。
- オリンピック・パラリンピックがことし無事に開催されれば、パラリンピックの選手たちは、単に障害を持って頑張るスポーツをする人ではなく、特別な才能を持った人だと理解する機会になると思う。この番組は芸術の面から障害とは個性で

ある、という理解を深めた点がよかった。今回は母親、信介さんを中心にインタビューしていた。宏介さんが小さい頃、大声で叫びながら暴れていた時期に、「父親は酒を飲みに行き、その場から逃げていた」という母のことばがあった。それも事実だと思うが、その後、父親がどのように寄り添い、変化したのかも知りたかった。また障害がある人も、生活をしていくために収入が必要であり、“絵届け問屋”というレンタルで絵を届けるビジネスが収入の一助になるのは、非常によいと思った。さらに、“きょうだい会”というコミュニティーが互いを助ける力になり、一緒に育てていく機運が広がることにつながっていると感じた。芸術家本人だけでなく、家族の視点はとても新鮮で、多様性の芽を育てる番組であると感じた。

- 家族の現実や心の動きをととてもリアルに伝えていたと感じた。家族の頑張りを理解してもらえ番組が、一つの点から、線としていろいろなところに広がっていけばうれしいと感じた。絵画レンタルも非常におもしろく、収入源を作り、宏介さんのためにつないでいくことは、これからの人生に必要なだと思った。最後の自分で帰っていく後ろ姿の映像は、不安だろうが自分自身の力で歩いて行ってほしいという制作者の気持ちが伝わる終わり方だったと感じ心に残った。
- 絵が持つ力と、家族の苦悩や喜びなど多角的に取材したよい番組だと感じた。絵を描く表情や力強い筆さばきをカメラで捉え、めきめきと絵の力をつけていく様子に感動した。また、大胆な構図で温かみがあるが、どこかユーモラスで、生命力にあふれた唯一無二の絵の力を感じた。宏介さんが言葉にできないもどかしさを表現する手段として絵と出会い、母親や松澤先生が根気強く寄り添い、さらに宏介さん自身の努力が今日につながるのだと知ることができた。壊れそうな家族が、宏介さんの創作活動を支えることで新しい家族の形を得て、さらに絵画レンタル、“きょうだい会”の活動などを通じて社会と積極的に関わり、還元するといったように宏介さんを中心にポジティブなエネルギーの広がりを感じた。病院の先生が自身の息子の絵を飾っていると話したシーンで、その場に絵があったのではと感じたが、絵が映らなかったのは何か理由があるのかと引っかかった。さらにキリンの親子の絵も少し光が反射してしまっており、もったいないと感じた。タイトルの「自由」は、制約、しがらみから解放されるというイメージがある。しかし番組からは、障害や家族の葛藤からの解放というよりは、むしろしっかりと向き合い、困難を抱えたままどう生き生きと暮らしていくのかが描かれていた印象を受けた。あるがままといったイメージを加え、もう一步踏み込んだタイトルであってもよかったと感じた。絵を通じた多様な社会への問いかけもあり、意義のある番組だと感じた。

(NHK側)

何物にも縛られない宏介さんの自由さが周りに影響を与え、皆が解き放たれていくという人間関係を表現したいということが番組の核にあった。宏介さんのどこまでも自由な感じは、最後一人で食事をしに帰ってしまうシーンで表現できるのではないかと思った。父親については、定年退職後に宏介さんと真摯（しんし）に向き合い、個展も支え、彼に関する本も書いている。5年前にがんで亡くなられたが、最後は家族全員で障害と向き合って生きていったという経緯があった。父親とのことももっと番組に入れたかったが、現在の状況を紹介することを優先したかったため、このような構成になった。

(NHK側)

障害をテーマに取り上げる場合、軸足をきちんと定めて取材し、心温まる話として共感を得られる番組もあると思うが、そこに安住してはいけないと思う。タイトルのつけ方をはじめ、障害があるにもかかわらず頑張っているというステレオタイプの描き方にならないようにということをこれまで以上に意識して取り組みたい。

<放送番組一般について>

- 3月24日(水)のプロフェッショナル 仕事の流儀「サンドウィッチマンスペシャル」を見た。新たな一面を発見できると期待して見た。売れるまでの間に一度解散の危機があったことや、東日本大震災を経験した後の活動など、二人の魅力について、テーマが絞れていてよかった。また、場面の転換に合わせ音楽が使われており、違和感なく視聴できた。過去の経験、苦労話が起点となり、現在、未来へという番組の一連の展開にも違和感がなかった。特に過去の話については、彼らのような苦労が自分には足りないのではと考え、解散の危機を解決したことなど参考になった。また被災地への思いなど、新しい気付きになることが多かった。楽屋で富澤たけしさんが話している時にカメラが寄っていくシーンで少し映像が乱れた。密着取材だからこそその臨場感があると思いつつも気になった。
- 3月29日(月)の逆転人生「人生100年時代！楽しく学ぼうライフシフト」をNHKプラスで見た。

NHKプラスには、少しの隙間時間に見逃した番組を見る。もしくは当てもなくプレイリストから選ぶという手軽さがあり、非常によいものだと改めて実感した。番組では、17年間主婦をしていた薄井シンシアさんが、その後ライフシフトを繰り返して、人生の後半で逆転していく痛快さが見事に描かれていた。生まれて教育を受ける。会社に就職し定年退職まで勤める。そして退職後死に至る。という3つのステージで考えられていた今までのライフスタイルに対し、マルチステージということばを使い、定年後も大きく環境を変え、仕事や生活を楽しむという実践例を知れた。番組後半に「無形資産」というキーワードが出てきて気になったが、その無形資産は1番が知識・スキル、2番が健康、3番が人脈とのことだった。3つめの人脈が、実はマルチステージの人生でとても重要であることを痛感し、考えさせられた。経験者である薄井さんの「過去は重荷ではなく、荷物ではなく、未来への土台である」ということばが、とても印象的だった。

- 3月29日(月)の「いろどりOITA」を見た。「おおいた彩発見」のコーナーが、石丸謙二郎さんから見ると大分ディープ旅という内容で、3か月ぶりにリニューアルしていた。方言で人の心を開く技術と、石丸さんの魅力で引っ張っていくのを感じた。50年ぶりに再会した由布院の老舗旅館の3代目との対談では、石丸さんの原点になった出会いだと語っており、短い時間だったが心に残った。4月5日(月)の放送では、九重町の野矢駅周辺で旅を始めるが、しばらく誰とも出会えない中、名誉駅長と会い、さらに途中の畑で見つけた食材を使い石丸さんが料理をし、ご主人が掘った温泉に入るといふ、とても心温まる展開だったが、多少出来過ぎではないかと感じる内容だった。新型コロナウイルス感染拡大下の状況なので、あまり無理せず、コーナーを長く続けてほしいと思った。
- 3月30日(火)の日本最強の城スペシャル(8)を見た。番組欄に小倉城が出るというので絶対に見ようと思った。奈良大学の千田嘉博教授が模型やCGを使い、城の形状や特徴を分かりやすく説明してくれ、納得できた。また教授自身が楽しそうに話をしており、見ている側も楽しめた。タレントの村井美樹さんが城のイメージをしょうゆ顔、ソース顔などと表し、最初に見た犬山城の天守閣がかわいいおじさんに見えたという話も面白く、幅広い世代が一緒になって盛り上がっていることがとてもよかった。昨今災害が多く、国土の強じん化は非常に大事なテーマだが、そもそも城は地形や自然を考えて造られていることを改めて感じた。建物の強さだけでなく、景観が価値になることを改めて感じた。火灯窓や唐づくりなどの専門用語は、どこを指し、機能は何なのかなども説明があるとより関心を持てると思った。城は方位や地相がとても大事だが、今回はあまり触れていなかったもので、そのことについても聞きたいと思った。

- 3月30日(火)のNHK令和3年度予算審議～参議院総務委員会～を見た。端島を扱った番組について質問しており、NHKが昭和30年に制作した「緑なき島」に使用している映像の真がんを問うものだった。質問に対する前田会長の答弁は、同様の回答が繰り返され、納得できるものではないと思った。答弁の中で、昭和30年以前に撮影され、保管されていた炭鉱の映像が140、全体で30時間分あったほか、「緑なき島」以外の端島炭鉱内部の映像の中には服を着ないで、つるはしを持っている映像があることを明らかにした。保管されている映像を活用して検証番組を制作してほしいと思った。

- 4月9日(金)のくまもとの風「いまも一緒に生きている」を見た。熊本地震発生から5年たち、どのような切り口で制作したのか興味を持って見た。地震でわが子を亡くし、今も前を向いて生きることができない親の様子が描かれていた。分断された新阿蘇大橋がことし開通し、熊本城天守閣の公開再開が予定されるなど、前向きな明るい話題が多い状況にある一方で、いまだに前に進むことができず苦しんでいる人たちがいることを知ってほしいという意図を感じた。亡くなった子どもについて語ることは、想像を絶する痛みを伴うと思うが、その話のおかげで、当たり前な家族の存在のありがたさを再確認できた。さまざまな立場の人が社会には存在し、一緒に生きていきやすい社会にしなくてはならないという気付きをもらった。前向きに頑張る人だけでなく、全ての人に寄り添う姿勢を示した番組だったと感じた。

- 4月9日(金)のかごスピ「やっぱり凄(すご)いぜ!桜島」を見た。噴火で形を変えてきた桜島の成り立ちや、防災施設の建設現場の紹介、噴火当時を知る人の話など知られていない桜島を訪ねる内容で、タイトルにも興味を持った。冒頭、映像やテロップを使い、テーマを短い時間で紹介していくのも導入として引きつけられた。土石流発生時の土石の除去作業は氾濫を防ぐために行っていることなど、初めて知ることも多かった。また画面上に地図が出ていて分かりやすく、当時の写真や映像なども織り交ぜていて様子が伝わった。また、展望所を訪れるシーンがあったが、天候不良で何も見えず、天候のよいときに取材してほしい。さまざまなテーマを盛り込んだことは興味を引く一方で、全体的に内容が浅く、何を伝えたいかが見えなかった。時々流れるBGMが映像と合っておらず違和感があった。カメラの揺れと切り替えが多い箇所もあり、少し雑な印象を受けた。桜島と桜の映像を背景にした終わり方もありきたりでもの足りなく感じた。桜島のことを詳細に知らない人は多いので、自然、災害、暮らしなどさまざまなテーマで今後も丁寧に伝えてほしい。

また噴火のニュースによって風評被害が発生する場合もある。噴火があっても、平然と暮らしている実態もあるので、そのような部分も伝えてほしい。

- 4月11日(日)のNHKスペシャル「家族が最期を決めるとき～脳死移植 命めぐる日々～」を見た。家族の承諾により臓器提供できる改正臓器移植法の施行から11年を迎え、日本臓器移植ネットワークが全てのドナーを対象に行った調査を基に、家族の葛藤を具体的な事例を通して、丁寧に描いた番組だった。臓器移植法改正により、脳死による臓器提供数は8倍に増えたが、実態はなかなか見えてこない。近年、報道自体も減っていたように思う。番組では、特に家族の葛藤を描くことにより、脳死について、また交通事故や自死のもたらす厳しい現実や悲しみ、臓器移植という新しい医療について考える機会を提供できたのではないかと思う。特に息子の臓器を提供した両親が、息子の一部分だけでも誰かの中で生きてくれることが、命を継続させることにつながるのではないかと考える一方で、目の前で心臓が動いている息子を自分たちが殺してしまうのではないかという恐怖を自身の口から率直に話していて、胸を打たれた。悩んだ末に臓器提供しなかった家族のことも紹介していて、情緒的に流されることなくバランスにも配慮されていたように感じた。
- 4月11日(日)のNHKスペシャル「家族が最期を決めるとき～脳死移植 命めぐる日々～」を見た。突然家族が脳死状態になったとき臓器提供するかどうかという、3つのケースが取り上げられており、決断までの過程が丁寧かつ細やかに描かれていた。最初の事例は、脳波があり安堵した家族が、2日後には脳死と判定され、臓器移植の判断を迫られる様子が描かれていて、決断までの時間がとても短いことを実感した。日頃から臓器移植について、家族、特に子供とさらに話をしておく必要があると感じた。一方で、ドナー家族の気持ちの細部を描き過ぎ、メッセージがやや散漫になった気もした。2例目は、自死した夫の臓器移植を決断した家族の話だったが、ふさわしい事例だったのか疑問が残った。家族が苦しむ様子を見てつらくなった視聴者もいると思うので、家族への長期的なサポートについても紹介してほしいかった。視聴後、アンケート調査の結果を見たが、ドナーとの続柄が、親が4割、配偶者が3割、子供が14%だった。今回は、最も判断に悩むであろう子供のケースだったが、基礎情報としてこのような数字も紹介してほしいかった。臓器提供に関する切り口は、ほかにもたくさんあると感じ、今後も多角的な番組を制作してほしいと思った。
- 4月11日(日)に再放送されたサラメシ シーズン11 (1)「最後の母弁／さよなら藝大食堂」を見た。娘が小さい頃は構ってあげられなかったが、弁当を約2年

半作ってきたことで、家族が徐々に一つになっていったというエピソードが面白かった。番組に出ることが夢だったという母を、ディレクターが楽しそうに訪ねるシーンも非常に好感を持てた。後半の東京藝術大学学生食堂では、新型コロナウイルス感染拡大の中で学内に入れなかったため、教員をしているクリエイティブディレクターの箭内道彦さんに、撮影を任せた演出が逆に楽しかった。学長が食堂に来て、自身が作曲した「不滅のバタ丼」という曲をバイオリンで弾くなど心温まるシーンがたくさんあった。学生食堂も人が減り、学生を通わせることができないなど社会的な背景を思った。俳優・中井貴一さんのいい意味で気の抜けたナレーションは心地よいが少し寂しさもあり、変わっていく世の中や、さまざまな人生を感じた番組だった。

- 4月12日(月)に再放送されたグレートレース スペシャル「超高速！サバイバル沖縄200km」(BS1 前0:42~1:31)を見た。初めてグレートレースに触れ、全く知らない世界にとっても驚いた。レースのドラマと沖縄の海、やんばるの森など大変美しい景色もあり、見応えがあった。新型コロナウイルス感染拡大によりさまざまな大会が中止となる中、今回は出場数を絞って行われたことで、日本屈指のトップランナーが集まる大会になったようだった。レースで優勝経験がある選手の走りは、200キロであっても、一時は1キロ5分を切るというハイペースで、その肉体と精神力に最も驚き、この過酷なレースはどのように撮影しているのかも大変興味が湧いた。厳しいレースでありながら、給水や栄養補給、コース確認などは、家族や友人のサポートで行い、いない人は自分で対応すること、さらに選手はプロではなく、多様なバックグラウンドがあることにも驚いた。インターネットの普及により、情報を選択し、好きなものだけを見聞する世の中になったと思う。その世界だけで生きていくことはできるが、全く価値観が違い、理解できない世界に触れ、学ぶということがとても大切だと感じ、メディアの役割を強く感じた。人はなぜ走るのかという問いかけの答えは分からないが、分からないからこそ、画面で活躍を見るのがとても楽しみになった。取材も大変だと思うが今後も期待している。

(NHK側)

熊本地震などの災害関連の放送に関して、今なお頑張っている人を紹介することは、復興に対する理解や支援を拡大していくうえでは非常に意味のある放送だと思う。しかしもう一つのねらいである、災害に備え何をするか、あるいは起きたとき、どれだけ犠牲を少なくできるかについては、ポジティブな伝え方だけでは目的を達成できないと思う。バランスを取り伝えていくことが、公共メディアとしてこれまで以上に大事になると思うので、災害

報道に限らず、これからの番組づくりに生かしていきたい。

NHK福岡拠点放送局
番組審議会事務局